

## 2

## 北京編

## 北京の小学生の1日

6:30ごろ

7:20~  
7:50

## 登校

## 起床



家族の方(保護者・祖父母)との登校が多い。

- ・交通手段として徒歩、バス、自転車、自家用車などさまざまである。
- ・登校してくる子どもたちは、校門に立っている先生方にきちんとあいさつをしている。

登校~8:00

8:00~  
8:40

## 体操

## 朝の自習

ラジオ体操からリズム体操まで。40分かかる。

- ・体操は校庭で行っている。
  - ・体力向上を図るため、教育委員会から学校に毎日1時間の運動時間を確保するようにと指導がある。
- 学校の工夫策として、週3回の体育の授業と毎朝の40分の体操で、1日1時間の運動時間を確保している。

8:40~  
11:45

## 授業



授業中、挙手し、発言する子どもが多い。私語、立ち歩きはまったくみられない。

- ・授業は1時限が40分である。
- ・すべての教室にスクリーンがある。先生は板書のかわりに、手元のパソコンに文字などを打ち込んで、それがスクリーンに映し出されている。CD-ROMなどのソフトもよく活用されている。
- ・授業と授業との間に10分の休憩時間がある。2時限と3時限との間に、「目の体操」(眼保健操)もある。

11:45~  
13:50昼食  
昼休み

教室でお弁当(弁当業者による配達)を静かに食べている。

- ・お弁当を食べる子、学校の食堂で食べる子、自宅に戻って食べる子と昼食のとり方がさまざまである。
- ・昼休みが2時間以上もある。昼食の後、一休みをする子、本読みをする子、校庭で遊ぶ子など、思い思いに過ごす。



13:50~  
16:15

### 授業（2時限 or 3時限）

- ・学校は完全週5日制である。
- ・5年生は教育課程の規定により、授業時数は週30時間となっている。曜日によって、7時限行う日もある。

16:15~  
16:45

### 正規の授業後の補習クラス

- ・正規の授業と違って、希望者だけが参加する。しかし、実際この時間帯は保護者がまだ仕事をしているため、ほとんどの子は補習クラスへの参加を希望しているようである。

家族の方が迎えに来ている。



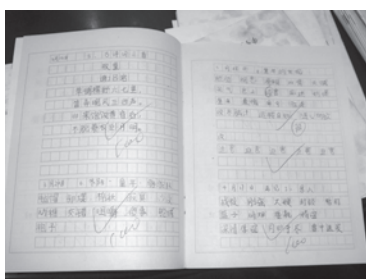
- ・安全のため、家族の方と一緒に帰宅する子が多い。
- ・高学年の場合、1人で帰宅することもある。

16:45~

下校

17:00ごろ~  
18:00ごろ

宿題時間



- ・1時間ほど学校の宿題に取り組む。場合によっては、親から出される宿題もある。
- ・「きちんと宿題をしなければいけない」と、小学生手帳において明示されている。

18:30ごろ

### 夕食

- ・共働きの親であってもこの時間帯にはほとんど帰宅しているため、家族で夕食のテーブルを囲むのはふつうの光景である。

19:00~  
20:30

### 遊びなど

- ・テレビを見たり、パソコンで遊んだり、本を読んだりして過ごしている。時々、宿題をすることもある。

20:30ごろ

### 就寝

- ・学校の始業時刻が早いので、朝の起床が早く、就寝時刻もあわせて早い。

# 北京調査から教えられたこと

樋田大二郎（青山学院大学教授）

中国における近年の教育政策の変遷をみると、受験競争の激化や拝金主義的・個人主義的教育観の広がりへの対策として、1990年代半ばに中国の教育界や教育関係者の間に学校教育の果たす役割を見直す必要があるという認識が広まった。2000年代に入って、『基礎教育課程改革要綱（試行）（2001年6月）』『新教育課程標準（新しい学習指導要領）（2005年9月）』が相次いで発表され、受験での合格を目指す「応試教育（受験教育）」から、子どものさまざまな素質や人間性を育てようとする「素質教育」へとカリキュラムを転換した。「素質教育」は乱暴を承知で日本の教育と比較すると、中国版のゆとり路線や新しい学力観である。中国は「素質教育」を具体化するため、各教科の改革を進めるとともに、日本の「総合的な学習の時間」に相当する「総合実践活動」を導入している。

私は、2007年6月に北京を訪問した。その際に、中国教育部（日本の文部科学省にあたる）の基礎教育課程教材発展センターで『新教育課程標準』の作成に携わっている研究者—今回の北京調査部分をご協力いただいている劉 堅氏と付 宜紅氏—に今回の調査結果およびその背景について、インタビューを行った。また、実際に調査にご協力いただいた小学校2校を訪問し、児童、教員および校長へのインタビューを試みた。

本報告では、アンケート結果とインタビュー結果をもとに北京の小学校の今を報告し、これをもとに日本の小学校教育のあり方について考えたい。

## 1. 「応試教育」から「素質教育」へ…… 『新教育課程標準』の作成にかかわっている方へのインタビューから

中国では今、子どものさまざまな素質や人間性を育てようとする「素質教育」が推進されている。その背景には、「応試教育」の過熱への対策や、詰め込み教育による弊害の排除がある。

### 〔外発的動機づけ〕

中国では、学業面で子どもへのプレッシャーが高いとされている。北京の小学生は東京の小学生と比較すると、学習時間が長い。東京の小学生は平日に平均で101分勉強する。これに対して北京の小学生は132分勉強している。北京の小学生は下校時刻が遅いため、平日にはあまり塾に行かないことを考えると、家庭学習時間は北京の小学生のほうがはるかに長い。北京の小学生は学習時間が長いだけではない。表1のように、東京の小学生よりも「新しいことを知るのが好きだ」が74.5%と高くなっており、勉強への肯定的な様子が見える。

しかし、学業面でのプレッシャーは重圧となっている可能性がある。「勉強で友だちに負けたくない」が79.9%、「親の期待が大きすぎる」が32.0%などと東京よりも否定的な状況が読み取れる。このことは学習意識にも影響を与え、「問題が解けたり、何かがわかるとうれしい」が東京の小学生よりも少なくなっている。一般に北京の小学生は優等生的回答をしようとする傾向があり、数値にバイアス（イエス・テンダンシー）がかかっているものと思われる。それなのに学習意識に関

して、このような否定的傾向が浮かびあがってきている。

インタビューに応じてくれた劉氏は、この調査結果について「今回の北京調査の結果をみると全体的に数値が高く表れている。しかし、もし外部からのプレッシャーがなければ、多くの質問については、日本とほぼ同じような数値が出るのではないか。あるいは場合によっては、日本より低い数値が出るかもしれない」と述べ、『「問題が解けたり、何かがわかるとうれいし』をみると、北京は49.4%で日本より30ポイントも低いという結果となった。これについては、やはり内発的動機づけより外的な動機づけが強いことがわかる」としている。

### [教授スタイルの変化]

「素質教育」は、日本のゆとり路線や新しい学力観に近い方向性を持っている。前述の劉氏は次のように述べている。「中国では今、教授方法が大きく変わりつつある。国として、学習内容の難易度を下げており、かつ、学習内容がより生活と密着するように考慮されている。これは大きな変化だ。地域とのつながりを持つような学習内容も多くなってきている」「また、教師の教育方法については、教材を教えるのではなく、教材を使って教えるようになっている。直観、マルチメディア、子どもの創造性を引き出せるような方法、子どもの学習への参画などを重視している。確かに中国では、学校ではパソコンやインターネットの使用率はまだ低いですが、これからできるだけマルチメディアを使いたい」「最近、アメリカのコロンビア大学から訪中団があ

り、北京の小学校の数学の授業を見学して驚いていた。以前は、中国の授業の内容の難しさについて驚いていたが、今回の訪中では、子ども同士のコミュニケーション、授業中、意見を発表したり、先生が子どもの意見を尊重したりしている様子を見て、驚いていた。もちろん、このような授業はまだまだ少なく、広がっていないが」。

### [評価方法]

教育内容・教育方法の変化に応じて、評価方法も変わろうとしている。「学習内容、教授スタイルの変化に対応して、評価の内容・方法、評価の利用などについても変わりつつある。またテストは学習のプロセスとして重視され、単なる成績の良し悪しを判断するだけではなくになった。テストの方法も変わってきた。とくに小学校では、筆記テストだけではなく、場合によってはゲーム、活動を使用し、評価することもある（劉氏）」。

## 2. よく統制された教室……小学校の見学と教員・児童へのインタビューから

以下では、われわれが学校訪問で見たこと、聞いたこと、考えたことをいくつかご紹介したい。

小学校訪問では、休み時間に無邪気に遊ぶ児童の姿、訪問者であるわれわれに人懐っこくあいさつする児童の姿に、子どもらしさを感じた。日本の子どもと変わらないな、という印象を持った。

しかし、授業中の様子については、日本との違いを感じ、大いに驚いた。国語の授業や

表1 学習に対する意欲

	(%)	
	東京 (1,105)	北京 (1,195)
勉強で友だちに負けたくない	56.8	79.9
新しいことを知るのが好きだ	61.7	74.5
問題が解けたり、何かがわかるとうれいし	79.5	49.4
親の期待が大きすぎる	16.5	32.0

注1) 複数回答。

注2) ( ) 内はサンプル数。

英語の授業では、学習内容を頭だけで理解するのではなく、身体や気持ちで感じとらせようとしており、この面では日本と共通の志向を感じた。しかし、北京では日本と違って授業が非常に統制されていて、とてもスピード感がある。さらに、次に述べるように、良く統制されていた。

#### [規律の正しさ]

中国の小学校を訪ねて感じたのは、子どもたちが集団行動の規律をしっかりと身につけていることである。

始業前の数分間、立ち歩く者はなく、先生が「休め」と号令すると、全員が一斉に机の上に伏して（頭を置き）休んだ。授業中は、まったく私語をしない。さらに、小学5年生の国語（中国語）の授業では、先生が「2人組で話し合いなさい」「4人組で話し合いなさい」「ノートに考えを書きなさい」と指示すると、全員が間髪を入れず指示にしたがった。あまりの反応の速さと規律正しさに、驚きと疑問を感じた。速さと規律正しさは、気持ちや余韻とどこまで両立するのだろうか。

#### [学歴主義]

中国は学歴社会である。どの段階の学校を卒業して社会に出たか、つまり、日本でいう中学卒業か高校卒業か大学卒業かで、どのような仕事につけるかの大枠が決まってしまう。とくに、大学卒業の学歴は、最近では希少価値が下がってきているとはいえ、日本よりもはるかに高い価値がある。2006年の中国の大学進学率は22%（「人民網日本語版」2007

年6月28日）にとどまる（なお、北京市では72.9%と非常に大学進学率が高い）。

今回の国際6都市調査では、北京の小学生は東京の小学生より学歴主義的で上昇志向が強く、しかも、競争社会認識が強いという傾向がみられた（表2）。「いい大学を卒業すると将来、幸せになれる」は、北京で41.9%（「とてもそう思う」の%、以下同）、東京で24.4%である。また、「将来、一流の会社に入ったり、一流の仕事につきたい」は北京62.8%に対し、東京で32.0%、「（わが国は、）競争がはげしい社会だ」は北京で64.7%なのに対し、東京では25.0%であった。

#### [小皇帝といわれるが]

中国では1970年初頭から人口抑制策が始まり、1979年から厳格な「一人っ子政策」が推進された。今では、子どもの両親も一人っ子のケースが多くなっている。1人の子どもに対して、両親と4人の祖父母、合計6人の愛情が集中するため、甘やかされて育ち、「小皇帝」と呼ばれるわがままな子どもが増えたといわれている。

ただし、教育問題は、どこの国でも大げさに語られる傾向がある。そこで、われわれは、小学生の寮生活をみることで、この「小皇帝」の問題を確かめてみた。その結果は、少なくとも、寮生活をしている小学生は“わがまま”という表現が該当する子どもではなかった。

北京の小学校では、安全対策で、登下校の際に、ほとんどの児童に保護者の送り迎えがある。保護者が遠いところで働いていて送り迎えができない子どもを対象に、小学校に寮

表2 社会観・価値観

	(%)	
	東京 (1,105)	北京 (1,195)
いい友だちがいると幸せになれる	68.4	57.4
いい大学を卒業すると将来、幸せになれる	24.4	41.9
(わが国は、) 努力すればむくわれる社会だ	30.3	48.1
(わが国は、) 競争がはげしい社会だ	25.0	64.7
将来、一流の会社に入ったり、一流の仕事につきたい	32.0	62.8

注1) 4段階の選択肢のうち「とてもそう思う」の比率。

注2) ( ) 内はサンプル数。

が併設されていることがある。私たちが訪問した2校のうちの1校はそうした子どもを対象とした寮を持っており、全校児童の約4割が寮生活をしていた。寮の居室は、すべて8人部屋だった。居室の窓には赤い旗のシールが何枚かずつ貼ってあった。整理整頓が上手にできるたびにシールが1枚貼られていくのだ。われわれの目には、どの部屋も整理整頓が徹底されているようにみえた。

寮には遊技場があり、設備が大変充実していた。テレビゲームその他の一人遊びのおもちゃや遊具はなく、大半の遊具が複数の子どもで遊ぶものなのが印象的であった。寮に持ち込むことが許されている私物のおもちゃは人形が1つだけということであった。われわれが寮でみた小学生の生活は、このように、「小皇帝」のイメージとは異なり、楽しくかつ厳格な集団生活といえる。

#### [家庭学習]

日本で暮らす中国人に小学校時代のことをたずねたところ、親と教師からの勉強への圧力が強かったという。また、周囲の子どもが一生懸命勉強するので、自分も一生懸命勉強するのが当たり前だと思っていたと答えた。この勤勉さの背景の1つに、前述のように1人の子どもに対して6人の親と祖父母がいて、この6人が熱い教育期待をかけるという状況がある。

今回の調査結果では、北京の小学生は非常によく家庭学習をしている。平日には予習、復習や宿題にかかる家庭学習時間が長い。自分で授業を発展させて学習することも多い。私たちの訪問した学校では、学校が教科ごとに宿題用のノートを作成して、子どもたちの宿題指導を徹底していた。教員へのインタビューでは、「小学生手帳の中に、決められている家庭学習時間の中で宿題をして提出することが触れられている。ほとんどの子がきちんと宿題を提出している。たまに提出しない子がいる場合、本人や保護者とコミュニケーションをとり、その原因を見つけ出し、宿題

ができない場合、教えてあげている」と話していた。「宿題の量は、低学年ではとても少ない。1年生は基本的には学校で宿題を済ませ、家に持ち帰らないようにしている。2年生、3年生はだいたい20分から30分程度。中・高学年は1時間程度」と述べていた。

児童へのインタビューでは、「毎日宿題をやるのが大変ですか?」という質問に対して、「いいえ、大変ではない。勉強はだいたい3時間かかる。宿題の内容は、新出漢字の書きや、予習復習もある。金曜日までに、学校の宿題を済ませる。学校の宿題以外に、土曜日、お父さんからの宿題もある、それはだいたい半日かかる(模擬試験のようなテスト)」という回答だった。

学校の学習奨励は宿題だけではない。表彰による学習の奨励も盛んだ。北京の小学校では、赤い線が入った肩章をつけている児童がいた。成績優秀も含めて、徳・知・体・美・労などさまざまな面において優秀であることを示す肩章だった。

#### [通塾]

北京では通塾率が高い。子どもは平日、学校の勉強に忙しい。これに対して、塾は土日に集中して勉強する傾向がある。しかも1教科だけではなく、2～3教科を勉強するので、学習時間も長い。

学歴主義が強く、6人の親のポケットから教育費が支払われる中国では、私的手段を利用しての学歴獲得が過熱している。北京の通塾の特徴は表3にあるように、通塾率が76.6%と高いこと、通塾日は土曜日と日曜日に集中しており、通塾日数が1～2日が70.4%と多いこと、1回あたりの学習時間が日本よりも長いことなどである。

インタビューに答えてくれた児童は、「日曜日は塾に行く。国語、数学、英語で、朝7時半から11時半まで、半日かかる。習い事は以前やったが、今は、中学受験のためやめた(児童A)」 「今、塾に行っている。国語、数学、英語で、毎週日曜日に通っている。数学

表3 学習塾

		(%)	
		東京	北京
学習塾通塾率	行っている	51.6	76.6
	行っていない	34.8	12.2
通塾日数	1～2日	39.3	70.4
	3日以上	58.8	27.6
1回の学習時間	30分くらい+1時間くらい	19.0	11.3
	2時間くらい	27.7	28.6
	3時間くらい+4時間以上	50.7	58.3

注)「無回答・不明」は省略した。

は2時間、国語も2時間、英語は半日かかる。習い事はフルートを習っている。小学校2年生から始めた。幼稚園の時には、国語、数学、英語、囲碁を習っていた(児童B)」と答えた。

#### [板書が少ない理由—デジタル・ディスプレイの活用]

北京を訪れる前に、われわれは、1つ大きな疑問を抱えていた。北京の小学生は、あまり先生の板書を写さないのである。「黒板に書かれたことを、きちんとノートに書く」ことが「よくある」と答えた児童の割合が、東京で64.7%に対して、北京では28.2%にとどまっていたのである。なぜ、学校の勉強をしっかり行っている北京の児童が、先生の板書をノートに写さないのだろうか。板書をノートにとることは日本の小学校教育の基本中の基本である。

北京の授業をみて、すぐに答えがわかった。見学したすべての教室に大画面ディスプレイがあり、教師が黒板を使わず、このディスプレイをパソコンにつなげて、さまざまに使いこなしていたのである。教科によって、黒板の使用頻度が違ってくると思うが、われわれが見学した授業では、どの教室でも黒板はほとんど使われていなかった。黒板を上手に使う教師が優秀な教師であると信じてきたわれわれには、とてもショックなことであった。

教師へのインタビューでは、ノートテキングは「低学年は知っている字が少ないので、あまりすすめていない。中・高学年は少しず

つやっているが、ノートをとるのは基本的には小学生はまだ難しい」と答えた。北京では漢字が板書のハードルになっているのかもしれない。

#### [[「応試教育」がなくなる理由]

中国は、猛烈な学歴主義社会である。前述のように家庭では、勉強させるために6人のおとなから、子どもへの強い学習圧力がかかる。また、中学進学システムも子どもに勉強を強いる。さらに、教師は「学力に関する要求」があるので、宿題や練習を出さざるを得ない。

インタビューで、ある教師は次のように答えている。

「私たちはとくに何かやっているわけでもない。今、中国は人口が多いし、無意識のうちに、子どもたちへのプレッシャーが大きいと思われる。また保護者が子どもにプレッシャーを与えている。学校では、私たち教師にもある程度学力に関する要求があるので、私たちはふだん子どもに対して多くの宿題や練習を出さざるをえない状況でもある。それらは自然に、子どもにプレッシャーを与えてしまうだろう。また、子どもたちは次に、やはり中学校に行く。何によって中学校に入るのか。小学校では『素質教育』とっているが、進学に際してはやはり成績が重視されている。小学校を卒業できても、いい中学校に行けないと、いい大学には入れない」。

### [中学進学と教員研修]

中学受験と教員研修制度について、日本で読んだり聞いたりしたことがわかりにくかったので、訪問した小学校の教員と校長にたずねた。わかりにくかった理由は、中学進学の制度が頻繁に変わっていたり、教員研修が日本とは大きく異なるシステムだったりしたからであった。

まず、中学進学についてインタビューした教員は次のように話してくれた。

「毎年、国の政策が違う。今年は中学入学試験をしないという政策らしい。試験できない場合、成績と関係なく、学区内のいくつかの中学校の中から自分が行きたい学校を選んで、自分の履歴（近年の成績、とった賞など）を書いて希望する中学校に提出する。中学校が引き受けてくれたら、入れる。落ちることもある。今まで受験してもいいという年もあった。私立中学校については試験が許されるが、それらの学校はたいてい寄宿制である」。

次に、教員研修については、訪問した小学校の校長は、以下のように教えてくれた。

「必ず受けないといけない研修については、5年に1回。教師の継続教育の一つと位置づけられている。研修は7つか8つのカリキュラムで構成されている。それぞれ教材がある。内容は職業道徳を含めて、教育理論、心理学、コンピューター、また、専門の教科である。たとえば国語であれば、国語や英語などである。研修は一定の時間数を満たさないといけない。時間数を満たし、かつ試験に合格したら、研修の通知表にそれぞれの試験の成績を載せ、合格の印を押され、継続教育合格証をもらってはじめて、教員免許が更新できる。一度先生になったら、永遠に先生としてやっていけるわけではない。ごくわずかだが、現実に試験に落ちる先生はいる。本校にもそのようなケースがあった。そうした先生は食堂に移動したり、財産管理員になったり、経理をやってもらったり、あるいはこの学校から離れていくことになる」。

### 3. 「素質教育」やゆとり路線は根づくのか

教育は社会変革の前衛か後衛か。これは従来から議論のつきぬ問題である。中国は今、教育が後衛であることを脱しようとしている。受験競争の激化、拝金主義的・個人主義的教育観の広がりに対して、中国政府は学校がまず「素質教育」を行い、これによって社会的風潮を改めようとしている。しかし、学校は「応試教育」を求める保護者の要望にある程度応えざるを得ないようだ。このような中で「素質教育」を広めることは困難を極めるだろうことが容易に想像される。

日本では、中国の「素質教育」にあたるゆとり路線をはじめてからすでにずいぶんと時が経っている。

東京の小学生は北京の小学生よりも内発的動機づけから学習する傾向が強く、「問題が解けたり、何かがわかるとうれい」と答える割合が高い。ゆとり路線の成果とみることができるのではないか。しかし、そのかわり「新しいことを知るのが好きだ」という割合が低かったり、学習時間が北京の子どもよりも短かったりする。ゆとり路線は、学習習慣や学力水準の側面からは見直しが迫られている。

また、東京など大都市圏では中学受験が小学生の心身をむしろみつつある。幸い、日本の小学校は、中学受験にはかかわらないようにしているので、小学校教育自体が「応試教育」になってしまうことは避けられているが、小学生には進学塾で「応試教育」的学習方法や学力が求められている。

今、日本では次の学習指導要領で、ゆとり路線（「生きる力」）から撤退するのではなく、ゆとり路線に加えて家庭学習指導の徹底や教師主導の学習指導の充実をはかり、「生きる力」の学力の一層の充実を図ろうとしている。北京調査が示唆するものは、授業場面での実際の教え方、塾、中学との接続のあり方、教師の質などが、ゆとり路線定着の鍵になるかもしれないということである。